

芥川龍之介

芭蕉雜記



芭
蕉
雜
記

一 著書

芭蕉は一卷の書も著わしたことはない。所謂芭蕉の七部集なるものも悉門人の著わしたものである。これは芭蕉自身の言葉によれば、名聞を好まぬ為だったらしい。

「曲翠問ふ、発句を取りあつめ、集作ると云へる、此道の執心なるべきや。翁曰く、これ卑しき心より我上手なるを知られんと我を忘れたる名聞より出る事也。」

こう云ったのも一応は尤もである。しかしその次を読んで見れば、おのずから微笑を禁じ得ない。

「集とは其風体の句々をえらび、我風体と云ふことを知らするまで也。我俳諧撰集の心ない。しかしながら貞徳以来其人々の風体ありて、宗因まで俳諧を唱来れり。然ども我云所の俳諧は其俳諧にはことなりと云ふことにて、荷兮野水等に後見して『冬の日』『春の日』『あら野』等あり。」

芭蕉の説に従えば、蕉風の集を著わすのは名聞を求めぬことであり、芭蕉の集を著わすのは名聞を求めること

である。然らば如何なる流派にも属せぬ一人立ちの詩人はどうするのであろう？ 且又この説に従えば、たとえば斎藤茂吉氏の「アララギ」へ歌を発表するのは名聞を求めぬことであり、「赤光」や「あら玉」を著わすのは「これ卑しき心より我上手なるを知られんと……」である！

しかし又芭蕉はこう云っている。——「我俳諧撰集の心なし。」芭蕉の説に従えば、七部集の監修をしたのは名聞を離れた仕業である。しかもそれを好まなかつたと云うのは何か名聞嫌いの外にも理由のあつたことと思わ

なければならぬ。然らばこの「何か」は何だったであろうか？

芭蕉は大事の俳諧さえ「生涯の道の草」と云ったそうである。すると七部集の監修をするのも「空」と考えはしなかつたであろうか？ 同時に又集を著わすのさえ、実は「悪」と考える前に「空」と考えはしなかつたであろうか？ 寒山は木の葉に詩を題した。が、その木の葉を集めることには余り熱心でもなかつたようである。芭蕉もやはり木の葉のように、一千余句の俳諧は流転に任せたのではなかつたであろうか？ 少くとも芭蕉の心の

奥にはいつもそう云う心もちの潜んでいたのではなかったであろうか？

僕は芭蕉に著書のなかつたのも当然のことと思つてゐる。その上宗匠の生涯には印税の必要もなかつたではないか？

二 装幀

芭蕉は俳書を上梓する上にも、いろいろ註文を持っていたらしい。たとえば本文の書きざまにはこう云う言葉

を洩らしている。

「書やうはいろいろあるべし。唯さわがしからぬ心づかひ有りたし。『猿蓑』能筆なり。されども今少し大なり。作者の名大にていやしく見え侍る。」

又勝峯晉風氏の教えによれば、俳書の装幀も芭蕉以前は華美を好んだのにも関らず、芭蕉以後は簡素の中に寂を尊んだと云うことである。芭蕉も今日に生れたとすれば、やはり本文は九ポイントにするとか、表紙の布は木綿にするとか、考案を凝らしたことであろう。或は又ウイリアム・モリスのように、ペエトロン杉風とも相談の

上に、Typography に新意を出したかも知れぬ。

三 自釈

芭蕉は北枝との問答の中に、「我句を人に説くは我頰がまちを人に云がごとし」と作品の自釈を却けている。しかしこれは当にならぬ。そう云う芭蕉も他の門人にはのべつに自釈を試みている。時には大いに苦心したなどと手前味噌ささえあげぬことはない。

「塩鯛の歯ぐきも寒し魚の店。此句、翁曰、心づかひせ

ずと句になるものを、自讃に足らずとなり。又かまくらを生て出でけん初松魚と云ふこそ心の骨折人の知らぬ所なり。又曰猿の齒白し峰の月といふは其角なり。塩鯛の齒ぐきは我老吟なり。下を魚の店と唯いひたるもおのづから句なりと宣へり。」

まことに「我句を人に説くは我頬がまちを人に云がごとし」である。しかし芸術は頬がまちほど、何びとにもはつきりわかるものではない。いつも自作に自釈を加えるバアナアド・シヨウの心もちもちは芭蕉も亦多少は同感だったであろう。

四 詩人

「俳諧なども生涯の道の草にしてめんどうなものなり」とは芭蕉の惟然に語った言葉である。その他俳諧を軽んじた口吻は時々門人に洩らしたらしい。これは人生を大夢と信じた世捨人の芭蕉には寧ろ当然の言葉である。

しかしその「生涯の道の草」に芭蕉ほど真剣になった人は滅多にいないのに違いない。いや、芭蕉の氣の入れかたを見れば、「生涯の道の草」などと称したのはポオ

ズではないかと思う位である。

「土芳云、翁曰、学ぶ事は常にあり。席に臨んで文台と我と間に髪を入れず。思ふこと速に云出て、爰に至てまよふ念なし。文台引おろせば即反故なりときびしく示さるる詞もあり。或時は大木倒すごとし。鰐本にきりこむ心得、西瓜きるごとし。梨子くふ口つき、三十六句みなやり句などといういろにせめられ侍るも、みな巧者の私意を思ひ破らせんの詞なり。」

この芭蕉の言葉の気ぐみは殆ど剣術でも教えるようである。到底俳諧を遊戯にした世捨人などの言葉ではない。

更に又芭蕉その人の句作に臨んだ態度を見れば、愈情熱に燃え立っている。

「許六云、一とせ江戸にて何がしが歳旦びらきとて翁を招きたることあり。予が宅に四五日逗留の後にて侍る。

其日雪降て暮にまゐられたり。其俳諧に、

人声の沖にて何を呼やらん

桃鄰

鼠は舟をきしる暁

翁

予其後芭蕉庵へ参とぶらひける時、此句をかたり出し給ふに、予が云、さてさて此暁の一字ありがたき事、あだに聞かんは無念の次第也。動かざること、大山のごと

しと申せば師起き上りて曰、此暁の一字聞きとどけ侍りて、愚老が満足かぎりなし。此句はじめは

須磨の鼠の舟きしるおと

と案じける時、前句に声の字有て、音の字ならず、依て作りかへたり、須磨の鼠とまでは気を廻し侍れども、一句連続せざると宣へり。予が云、是須磨の鼠よりはるかにまされり。(中略) 暁の一字つよきこと、たとへ侍るものなしと申せば、師もうれしく思はれけん、これほどに聞てくれる人なし、唯予が口よりいひ出せば、肝をつぶしたる顔のみにて、善悪の差別もなく、鮎の泥に酔

たるごとし、其夜此句したる時、一座のものどもに我遅参の罪ありと云へども、此句にて腹を医せよと自慢せしと宣ひ侍る。」

知己に対する感激、流俗に対する軽蔑、芸術に対する情熱、——詩人たる芭蕉の面目はありありとこの逸話に露われている。殊に「この句にて腹を医せよ」と大気焰を挙げた勢いには、——世捨人は少時間わぬ。敬虔なる今日の批評家さえ辟易しなければ幸福である。

「翁凡兆に告て曰、一世のうち秀逸三五あらん人は作者、十句に及ぶ人は名人なり。」

名人さえ一生を消磨した後、十句しか得られぬと云うことになると、俳諧も亦閑事業ではない。しかも芭蕉の説によれば、つまりは「生涯の道の草」である！

「十一日。朝またまた時雨す。思ひがけなく東武の其角来る。(中略) すぐに病床にまゐりて、皮骨連立したまひたる体を見まゐらせて、且愁ひ、且悦ぶ。師も見やりたまひたるまでにて、ただただ涙ぐみたまふ。(中略)

鬮とりて菜飯たたかす夜伽かな 木節

皆子なり蓑虫寒く鳴きつくす 乙州

うづくまる薬のものと寒さかな 丈艸

吹井より鶴をまねかん初時雨

其角

一々惟然吟声しければ、師丈艸が句を今一度と望みたまひて、丈艸でかされたり、いつ聞いてもさびしをり整ひたり、面白し面白しと、しは嗔し聲もて讚めたまひにけり。」

これは芭蕉の示寂前一日に起った出来事である。芭蕉の俳諧に執する心は死よりもなお強かつたらしい。もしあらゆる執着に罪障を見出した謡曲の作者にこの一段を語ったとすれば、芭蕉は必ず行脚の僧に地獄の苦艱を訴える後ジテの役を与えられたであろう。

こう云う情熱を世捨人に見るのは矛盾と云えば矛盾である。しかしこれは矛盾にもせよ、たまたま芭蕉の天才を物語るものではないであろうか？　ゲエテは詩作をしている時には *Dæmon* に憑かれていと云った。芭蕉も亦世捨人になるには余りに詩魔の翻弄を蒙っていたのではないであろうか？　つまり芭蕉の中の詩人は芭蕉の中の世捨人よりも力強かったのではないであろうか？　僕は世捨人になり了せなかった芭蕉の矛盾を愛している。同時に又その矛盾の大きかったことも愛している。さもなければ深草の元政などにも同じように敬意を表し

たかも知れぬ。

五 未来

「翁遷化の年深川を出給ふ時、野坡問て云、俳諧やはり今のごとく作し侍らんや。翁曰、しばらく今の風なるべし、五七年も過なば一変あらんとなり。」

「翁曰、俳諧世に三合は出たり。七合は残たりと申されけり。」

こう云う芭蕉の逸話を見ると、如何にも芭蕉は未来の

俳諧を歴々と見透していたようである。又大勢の門人の中には義理にも一変したいと工夫したり、残りの七合を拵えるものは自分の外にないと思えたり、いろいろの喜劇も起ったかも知れぬ。しかしこれは「芭蕉自身の明日」を指した言葉であろう。と云うのはつまり五六年も経れば、芭蕉自身の俳諧は一変化すると云う意味である。或は又既に公にしたのは僅々三合の俳諧に過ぎぬ、残りの七合の俳諧は芭蕉自身の胸中に横わっていると云う意味であろう。すると芭蕉以外の人には五六年は勿論、三百年たっても、一変化することは出来ぬかも知れぬ。

七合の俳諧も同じことである。芭蕉は妄に街頭の売卜先生を真似る人ではない。けれども絶えず芭蕉自身の進歩を感じていたことは確かである。——僕はこう信じて疑ったことはない。

六 俗語

芭蕉はその俳諧の中に屢俗語を用いている。たとえば下の句に徴するが好い。

洗馬せばにて

梅雨の私雨や雲ちぎれ

「梅雨ばれ」と云い、「私雨」と云い、「雲ちぎれ」と云い、悉俗語ならぬはない。しかも一句の客情は無限の寂しみに溢れている。(成程こう書いて見ると、不世出の天才を褒め揚げるほど手数のかからぬ仕事はない。殊に何びとも異論を唱えぬ古典的天才を褒め揚げるのは!) こう云う例は芭蕉の句中、枚挙に堪えぬと云つても好い。芭蕉のみずから「俳諧の益は俗語を正すなり」と傲語したのも当然のことと云わなければならぬ。「正す」とは文法の教師のように語格や仮名遣いを正すので

はない。靈活に語感を捉えた上、俗語に魂を与えることである。

「じだらくに居れば涼しき夕かな。宗次。猿みの撰の時、宗次今一句の入集を願ひて数句吟じ侍れど取べき句なし。一夕、翁の側に侍りけるに、いざくつろぎ給へ、我も臥なんと宣ふ。御ゆるし候へ、じだらくに居れば涼しく侍ると申しければ、翁曰、これこそ発句なれとて、今の句に作て入集せさせ給ひけり。」（小宮豊隆氏はこの逸話に興味のある解釈を加えている。同氏の芭蕉研究を参照するが好い。）

この時使われた「じだらくに」はもう単純なる俗語ではない。紅毛人の言葉を借りれば、芭蕉の情調のトレモロを如実に表現した詩語である。これを更に云い直せば、芭蕉の俗語を用いたのは俗語たるが故に用いたのではない。詩語たり得るが故に用いたのである。すると芭蕉は詩語たり得る限り、漢語たると雅語たるとを問わず、如何なる言葉をも用いたことは弁ずるを待たぬのに違いない。実際又芭蕉は俗語のみならず、漢語をも雅語をも正したのである。

佐夜の中山にて

命なりわづかの笠の下涼み

杜牧が早行の残夢、小夜の中山にいたりて

忽ち驚く

馬に寝て残夢月遠し茶のけぶり

芭蕉の語彙はこの通り古今東西に出入している。が、俗語を正したことは最も人目に止まり易い特色だったのに違いない。又俗語を正したことに詩人たる芭蕉の力量も窺われることは事実である。成程談林の諸俳人は、——いや、伊丹の鬼貫さえ芭蕉よりも一足先に俗語を使っていたかも知れぬ。けれども所謂平談俗話に鍊金術を

施したのは正に芭蕉の大手柄である。

しかしこの著しい特色は同時に又俳諧に対する誤解を生むことにもなつたらしい。その一つは俳諧を解し易いとした誤解であり、その二つは俳諧を作り易いとした誤解である。俳諧の月並みに墮したのは、——そんなことは今更弁ぜずとも好い。月並みの喜劇は「芭蕉雑談」の中に子規居士も既に指摘している。唯芭蕉の使つた俗語の精彩を帯びていたことだけは今日もなお力説せねばならぬ。さもなければ所謂民衆詩人は不幸なるウォルト・ホイットマンと共に、芭蕉をも彼等の先達の一人に数え

上げることを憚らぬであろう。

七 耳

芭蕉の俳諧を愛する人の耳の穴をあけぬのは残念である。もし「調べ」の美しさに全然無頓着だったとすれば、芭蕉の俳諧の美しさも殆ど半ばしかのみこめぬであろう。

俳諧は元来歌よりも「調べ」に乏しいものでもある。僅々十七字の活殺の中に「言葉の音楽」をも伝えること

は大力量の人を待たなければならぬ。のみならず「調べ」にのみ執するのは俳諧の本道を失したものである。芭蕉の「調べ」を後にせよと云ったのはこの間の消息を語るものである。しかし芭蕉自身の俳諧は滅多に「調べ」を忘れたことはない。いや、時には一句の妙を「調べ」にのみ託したもののさえある。

夏の月御油より出でて赤坂や

これは夏の月を写すために、「御油」「赤坂」等の地名の与える色彩の感じを用いたものである。この手段は少しも珍らしいとは云われぬ。寧ろ多少陳套の譏りを招

きかねぬ技巧であろう。しかし耳に与える効果は如何にも旅人の心らしい、悠々とした美しさに溢れている。

年の市線香買ひに出でばやな

仮に「夏の月」の句をリブレットオよりもスコアアのすぐれている句とするならば、この句の如きは両者ともに傑出したものの一例である。年の市に線香を買いに出るのは物寂びたとは云うものの、懐しい気もちにも違くない。その上「出でばやな」とはずみかけた調子は、宛然芭蕉その人の心の小躍りを見るようである。更に又下の句などを見れば、芭蕉の「調べ」を駆使するのに大白

在を極めていたことには呆氣にとられてしまふ外はない。

秋ふかき隣は何をする人ぞ

こう云う莊重の「調べ」を捉え得たものは茫々たる三百年間にたった芭蕉一人である。芭蕉は子弟を訓えるのに「俳諧は万葉集の心なり」と云った。この言葉は少しも大風呂敷ではない。芭蕉の俳諧を愛する人の耳の穴をあけねばならぬ所以である。

八 同上

芭蕉の俳諧の特色の一つは目に訴える美しさと耳に訴える美しさとの微妙に融け合った美しさである。西洋人の言葉を借りれば、言葉の Formal element と Musical element との融合の上に独特の妙のあることである。これだけは蕪村の大手腕も畢に追隨出来なかつたらしい。下に挙げるのは几董の編した蕪村句集に載っている春雨の句の全部である。

春雨やものかたりゆく蓑と笠

春雨や暮れなんとしてけふもあり

柴漬や沈みもやらで春の雨

春雨やいざよふ月の海半ば

春雨や綱が袂に小提灯

西の京にばけもの栖みて久しくあれ果たる

家有りけり。

今は其沙汰なくて、

春雨や人住みて煙壁を洩る

物種の袋濡らしつ春の雨

春雨や身にふる頭巾着たりけり

春雨や小磯の小貝濡るるほど

滝口に灯を呼ぶ声や春の雨

ぬなは生ふ池の水かさや春の雨

夢中吟

春雨やもの書かぬ身のあはれなる

この蕪村の十二句は目に訴える美しさを、——殊に大和絵らしい美しさを如何にもものびのびと表わしている。しかし耳に訴えて見ると、どうもさほどのびのびとしない。おまけに十二句を続けさまに読めば、同じ「調べ」を繰り返した単調さを感じずる憾みさえある。が、芭蕉は

こう云う難所に少しも渋滞を感じていない。

春雨や蓬をのばす草の道

赤坂にて

無性さやかき起されし春の雨

僕はこの芭蕉の二句の中に百年の春雨を感じている。

「蓬をのばす草の道」の気品の高いのは云うを待たぬ。

「無性さや」に起り、「かき起されし」とたゆたった「調べ」にも柔媚に近い懶さを表わしている。所詮蕪村の十句もこの芭蕉の二句の前には如何とも出来ぬと評する外はない。兎に角芭蕉の芸術的感覚は近代人などと称す

るものよりも、数等の洗練を受けていたのである。

九画

東洋の詩歌は和漢を問わず、屢画趣を命にしている。エポスに詩を発した西洋人はこの「有声の画」の上にも邪道の貼り札をするかも知れぬ。しかし「遙知郡齋夜 凍雪封松竹 時有山僧来 懸燈独自宿」は宛然たる一幀の南画である。又「葺並ぶ裏は燕のかよひ道」もおのずから浮世絵の一枚らしい。この画趣を表わすのに自在の手

腕を持っていたのもやはり芭蕉の俳諧に見のがされぬ特色の一つである。

涼しさやすぐに野松の枝のなり

夕顔や酔て顔出す窓の穴

山賤のおとがひ閉づる葎かな

第一は純然たる風景画である。第二は点景人物を加えた風景画である。第三は純然たる人物画である。この芭蕉の三様の画趣はいずれも気品の低いものではない。殊に「山賤の」は「おとがひ閉づる」に気味の悪い大きさを表わしている。こう云う画趣を表現することは蕪村さ

え数歩を遜なければならぬ。(度たび引合いに出されるのは蕪村の為に気の毒である。が、これも芭蕉以後の巨匠だった因果と思わなければならぬ。)のみならず最も蕪村らしい大和画の趣を表わす時にも、芭蕉はやはり楽々と蕪村に負けぬ効果を取めている。

粽ゆふ片手にはさむひたひ髪

芭蕉自身はこの句のことを「物語の体」と称したそうである。

十 衆道

芭蕉もシエクスピアやミケル・アンジエロのように衆道を好んだと云われている。この談は必しも架空ではない。元禄は井原西鶴の大鑑を生んだ時代である。芭蕉も亦或は時代と共に分桃の契りを愛したかも知れない。現に又「我も昔は衆道好きのひが耳にや」とは若い芭蕉の筆を執った「貝おほひ」の中の言葉である。その他芭蕉の作品の中には「前髪もまだ若草の匂かな」以下、美少年を歌ったものもない訳ではない。

しかし芭蕉の性慾を倒錯していたと考えるのは依然として僕には不可能である。成程芭蕉は明らかに「我も昔は衆道好き」と云った。が、第一にこの言葉は巧みに諧謔の筆を弄した「貝おほひ」の判詞の一節である。するとこれをものものしい告白のように取り扱うのは多少の早計ではないであろうか？ 第二によし又告白だったにせよ、案外昔の衆道好きは今の衆道好きではなかったかも知れない。いや、今も衆道好きだったとすれば、何も特に「昔は」と断る必要もない筈である。しかも芭蕉は「貝おほひ」を出した寛文十一年の正月にもやつと二十

九歳だったのを思うと、昔と云うのも「春の目ざめ」以後数年の間を指しているであろう。こう云う年頃の Homo-Sexuality は格別珍らしいことではない。二十世紀に生れた我々さえ、少時の性慾生活をふり返って見れば、大抵一度は美少年に恍惚とした記憶を蓄えている。況や門人の杜国との間に同性愛のあったなどと云う説は畢竟小説と云う外はない。

十一 海彼岸の文学

「或禅僧、詩の事を尋ねられしに、翁曰、詩の事は隠士素堂と云うもの此道に深きすきものにて、人の名を知れるなり。かれ常に云う、詩は隠者の詩、風雅にてよろし。」

「正秀問、古今集に空に知られぬ雪ぞ降りける、人に知られぬ花や咲くらん、春に知られぬ花ぞ咲くなる、一集にこの三首を撰す。一集一作者にかよふの事例あるにや。翁曰、貫之の好める言葉と見えたり。かよふの事は今の人の嫌うべきを、昔は嫌わずと見えたり。もろこし

の詩にも左様の例あるにや。いつぞや丈艸の物語に杜子美に専ら其事あり。近き詩人に于鱗とやらんの詩に多く有る事とて、其詩も、聞きつれど忘れたり。」

于鱗は嘉靖七子の一人李攀竜のことであろう。古文辞を唱えた李攀竜の芭蕉の話中に挙げられているのは杜甫に対する芭蕉の尊敬に一道の光明を与えるものである。しかしそれはまず問はないでも好い。差当り此処に考えたいのは海彼岸の文学に対する芭蕉その人の態度である。是等の逸話に窺われる芭蕉には少しも学者らしい面影は見えない。今仮に是等の逸話を当代の新聞記事に改

めるとすれば、質問を受けた芭蕉の態度はこの位淡泊を極めているのである。――

「某新聞記者の西洋の詩のことを尋ねた時、芭蕉はその記者にこう答えた。――西洋の詩に詳しいのは京都の上田敏である。彼の常に云う所によれば、象徴派の詩人の作品は甚だ幽幻を極めている。」

「……芭蕉はこう答えた。……そう云うことは西洋の詩にもあるのかも知れない。この間森鷗外と話したら、ゲエテにはそれも多いそうである。又近頃の詩人の何とかイツヒの作品にも多い。実はその詩も聞かせて貰ったの

だが、生憎すっかり忘れてしまった。」

これだけでも返答の出来るのは当時の俳人には稀だったかも知れない。が、兎に角海彼岸の文学に疎かった事だけは確である。のみならず芭蕉は言詮を絶した芸術上の醍醐味をも嘗めずに、徒らに万卷の書を読んでいる文人墨客の徒を嫌っていたらしい。少くとも学者らしい顔をする者には忽ち癩癩を起したと見え、常に諷刺的天才を示した独特の皮肉を浴びせかけている。

「山里は万歳遅し梅の花。翁去来へ此句を贈られし返辞に、この句二義に解すべく候。山里は風寒く梅の盛に万

歳来らん。どちらも遅しとや承らん。又山里の梅さへ過ぐるに万歳殿の来ぬ事よと京なつかしき詠や侍らん。翁此返辞に其事とはなくて、去年の水無月五条あたりを通り候に、あやしの軒に看板を懸けて、はくらの妙薬ありと記す。伴ふどち可笑しがりて、くわくらん（霍乱）の薬なるべしと嘲笑ひ候まま、それがし答へ候ははくらん（博覧）病が買ひ候はんと申しき。」

これは一門皆学者だった博覧多識の去来には徳山の棒よりも手痛かったであろう。（去来は儒医二道に通じた上、「乾坤弁説」の翻訳さえ出した向井靈蘭を父に持ち、

名医元端や大儒元成を兄弟に持っていた人である。) 名
お又次手に一言すれば、芭蕉は一面理智の鋭い、悪辣を
極めた諷刺家である。「はくらん病が買ひ候はん」も手
厳しいには違いない。が、「東武の会に盆を釈教とせず、
嵐雪是を難ず。翁曰、盆を釈教とせば正月は神祇なるか
となり。」——こう云う逸話も残っている。兎に角芭蕉
の口の悪いのには屢門人たちも悩まされたらしい。唯幸
いにこの諷刺家は今を距ること二百年ばかり前に腸加答
児か何かの為に往生した。さもなければ僕の「芭蕉雜記」
なども定めし得意の毒舌の先にさんざん翻弄されたこと

であろう。

芭蕉の海彼岸の文学に余り通じていなかったことは上に述べた通りである。では海彼岸の文学に全然冷淡だったかと云うと、これは中々冷淡所ではない。寧ろ頗る熱心に海彼岸の文学の表現法などを自家の藁籠中に収めている。たとえば支考の伝えている下の逸話に徴するが好い。

「ある時翁の物がたりに、此ほど白氏文集を見て、老鶯と云、病蚕といへる言葉のおもしろければ、

黄鳥や竹の子藪に老を啼

さみだれや飼蚕煩ふ桑の畑

斯く二句を作り侍りしが、鶯は筍藪といひて老若の余情もいみじく籠り侍らん。蚕は熟語をしらぬ人は心のはこびをえこそ聞くまじけれ。是は筵の一字を入れて家に飼ひたるさまあらんとなり。」

白楽天の長慶集は「嵯峨日記」にも掲げられた芭蕉の愛読書の一つである。こう云う詩集などの表現法を換骨奪胎することは必しも稀ではなかったらしい。たとえば芭蕉の俳諧はその動詞の用法に独特の技巧を弄している。

一声の江に横たふや時鳥

立石寺（前書略）

閑さや岩にしみ入る蟬の声

鳳来寺に参籠して

木枯に岩吹とがる杉間かな

是等の動詞の用法は海彼岸の文学の字眼から学んだのではないであろうか？ 字眼とは一字の工の為に一句を穎異ならしめるものである。例えば下に引用する岑参の一聯に徴するがよい。

孤燈燃客夢 寒杵搗郷愁

けれども学んだと断言するのは勿論頗る危険である。芭蕉はおのずから海彼岸の詩人と同じ表現法を捉えたかも知れない。しかし下に挙げる一句もやはり暗合に外ならないであろうか？

鐘消えて花の香は撞く夕べかな

僕の信ずる所によれば、これは明らかに朱飲山の所謂倒装法を俳諧に用いたものである。

紅○稻○啄○残○鸚○鵡○粒
碧○梧○棲○老○鳳○凰○枝

上に挙げたのは倒装法を用いた、名高い杜甫の一聯である。この一聯を尋常に云い下せば、「鸚鵡啄残紅稻

粒 鳳凰棲老碧梧枝」と名詞の位置を顛倒しなければならぬ。芭蕉の句も尋常に云い下せば、「鐘搗いて花の香消ゆる夕べかな」と動詞の位置の顛倒する筈である。すると一は名詞であり、一は又動詞であるにもせよ、これを俳諧に試みた倒装法と考えるのは必しも独断とは称し難いであろう。

蕪村の海彼岸の文学に学ぶ所の多かつたことは前人も屡云い及んでいる。が、芭蕉のはどう云うものか、余り考える人もいなかっただらしい。(もし一人でもいたとすれば、この「鐘消えて」の句のことなどはとうの昔に気

ずいていた筈である。)しかし延宝天和の間の芭蕉は誰でも知っているように、「憶老杜、髭風ヲ吹テ暮秋歎ズルハ誰ガ子ゾ」「夜着は重し呉天に雪を見るあらん」以下、多数に海彼岸の文学を翻案した作品を残している。いや、そればかりではない。芭蕉は「虚栗」(天和三年上梓)の跋の後に「芭蕉洞桃青」と署名している。「芭蕉庵桃青」は必しも海彼岸の文学を聯想せしめる雅号ではない。しかし「芭蕉洞桃青」は「凝烟肌帯緑 映日瞼粧紅」の詩中の趣を具えている。(これは勝峯晉風氏も「芭蕉俳句定本」の年譜の中に「洞の一字を見落してな

らぬ」と云っている。)すると芭蕉は——少くとも延宝天和の間の芭蕉は、海彼岸の文学に少なからず心酔していたと云わなければならぬ。或は多少の危険さえ冒せば、談林風の鬼窟裡に墮在していた芭蕉の天才を開眼したものは、海彼岸の文学であるとも云われるかも知れない。こう云う芭蕉の俳諧の中に、海彼岸の文学の痕跡のあるのは、勿論不思議がるには当らない筈である。偶、「芭蕉俳句定本」を読んでいるうちに、海彼岸の文学の影響を考えたから、「芭蕉雑記」の後に加えることにした。

附記。芭蕉は夙に伊藤坦庵、田中桐江などの学者に漢学を学んだと伝えられている。しかし芭蕉の蒙った海彼岸の文学の影響は寧ろ好んで詩を作った山口素堂に発するのかも知れない。

十二 詩人

蕉風の付け合に関する議論は樋口功氏の「芭蕉研究」に頗る明快に述べられている。尤も僕は樋口氏のように、発句は蕉門の竜象を始め蕪村も甚だ芭蕉には劣っていない

かったとは信ぜられない。が、芭蕉の付け合の上に古今独歩の妙のあることはまことに樋口氏の議論の通りである。のみならず元禄の文芸復興の蕉風の付け合に反映していたと云うのは如何にも同感と云わなければならぬ。

芭蕉は少しも時代の外に孤立していた詩人ではない。

いや、寧ろ時代の中に全精神を投じた詩人である。たまたまその間口の広さの芭蕉の発句に現れないのはこれも樋口氏の指摘したように発句は唯「わたくし詩歌」を本道とした為と云わなければならぬ。蕪村はこの金鎖を破り、発句を自他無差別の大千世界へ解放した。「お手打

の夫婦なりしを衣更」「負けまじき相撲を寝物語かな」等はこの解放の生んだ作品である。芭蕉は許六の「名將の橋の反見る扇かな」にさえ、「此句は名將の作にして、句主の手柄は少しも無し」と云う評語を下した。もし「お手打の夫婦」以下蕪村の作品を見たとすれば、後代の豎子の悪作劇に定めし苦い顔をしたことであろう。勿論蕪村の試みた発句解放の善悪はおのずから問題を異にしなければならぬ。しかし芭蕉の付け合を見ずに、蕪村の小説的構想などを前人未発のように賞揚するのは甚だしい片手落ちの批判である。

念の為にもう一度繰り返せば、芭蕉は少しも時代の外に孤立していた詩人ではない。最も切実に時代を捉え、最も大胆に時代を描いた万葉集以後の詩人である。この事実を知る為には芭蕉の付け合を一瞥すれば好い。芭蕉は茶漬を愛したなどと云うのも嘘ではないかと思われるほど、近松を生み、西鶴を生み、更に又師宣を生んだ元禄の人情を曲尽している。殊に恋愛を歌ったものを見れば、其角さえ木強漢に見えぬことはない。況や後代の才人などは空也の痩せか、乾鮭か、或は腎気を失った若隠居かと疑われる位である。

狩衣を砧の主のうちくれて

路通

わが稚名を君はおぼゆや

芭蕉

宮に召されしうき名はづかし

曾良

手枕に細きかひなをさし入て

芭蕉

殿守がねぶたがりつる朝ぼらけ

千里

兀げたる眉を隠すきぬぎぬ

芭蕉

足駄はかせぬ雨のあけぼの

越人

きぬぎぬやあまりか細くあでやかに
芭蕉

上置の干葉きざむもうはの空
野坡

馬に出ぬ日は内で恋する
芭蕉

やさしき色に咲るなでしこ
嵐蘭

よつ折の蒲団に君が丸くねて
芭蕉

是等の作品を作った芭蕉は近代の芭蕉崇拜者の芭蕉とは聊か異った芭蕉である。たとえば「きぬぎぬやあまりか細くあでやかに」は枯淡なる世捨人の作品ではない。

菱川の浮世絵に髣髴たる女や若衆の美しさにも鋭い感受性を震わせていた、多情なる元禄びとの作品である。「元禄びとの」、——僕は敢て「元禄びとの」と言った。是等の作品の抒情詩的甘露味はかの化政度の通人などの夢寐にも到り得る境地ではない。彼等は年代を数えれば、「わが稚名を君はおぼゆや」と歌った芭蕉と、僅か百年を隔つるのに過ぎぬ。が、実は千年の昔に「常陸少女を忘れたまふな」と歌った万葉集中の女人よりも遙かに縁の遠い俗人だったではないか？

十三 鬼趣

芭蕉もあらゆる天才のように時代の好尚を反映していることは上に挙げた通りである。その著しい例の一つは芭蕉の俳諧にある鬼趣であろう。「剪燈新話」を翻案した浅井了意の「御伽婢子」は寛文六年の上梓である。爾来こう云う怪談小説は寛政頃まで流行していた。たとえば西鶴の「大下馬」などもこの流行の生んだ作品である。正保元年に生れた芭蕉は寛文、延宝、天和、貞享を経、元禄七年に長逝した。すると芭蕉の一生は怪談小説の流

行の中に終始したものと云わなければならぬ。この為に芭蕉の俳諧も——殊にまだ怪談小説に対する一代の興味の新鮮だった「虚栗」以前の俳諧は時々鬼趣を弄んだ、巧妙な作品を残している。たとえば下の例に徴するが好い。

小夜嵐とぼそ落ちては堂の月

信徳

古入道は失せにけり露

桃青

から尻沈む淵はありけり

信徳

小蒲団に大蛇の恨み鱗形

桃青

氣違を月のさそへば忽に

桃青

尾を引ずりて森の下草

似春

夫は山伏あまの呼び声

信徳

一念の鱸うなぎとなつて七まとひ

桃青

骨刀土器鏝のもろきなり

其角

瘦せたる馬の影に鞭うつ

桃青

山彦嫁をだいてうせけり

其角

忍びふす人は地蔵にて明過し

桃青

釜かぶる人は忍びて別るなり

其角

槌を子に抱くまぼろしの君

桃青

今其とかげ金色の王

峡水

袖に入る螭龍夢を契りけむ

桃青

是等の作品の或ものは滑稽であるのにも違くない。が、

「瘦せたる馬の影」だの「槌を子に抱く」だのの感じは当時の怪談小説よりも寧ろもの凄いい位である。芭蕉は蕉風を樹立した後、殆ど鬼趣には縁を断ってしまった。しかし無常の意を寓した作品はたとい鬼趣ではないにもせよ、常に云う可らざる鬼気を帯びている。

骸骨の画に

夕風や盆挑灯も糊ばなれ

本間主馬が宅に、骸骨どもの笛、鼓をかまへて能する所を画きて、壁に掛けたり（下略）
稲妻やかほのところが薄の穂

日本文学電子図書館

芭蕉雜記

著 者：芥川龍之介

制作者：宮澤一郎

底 本：「梅・馬・鶯」

新潮社

大正15年12月21日 印刷

大正15年12月27日 発行



日本文学電子図書館